

海外の森林

ヨーロッパ、森林の利活用

日時：平成22年11月20日（土） 13:00～15:00

講師：寺下 太郎（愛媛大学農学部准教授）

概況



・ドイツ南西部のシュバルツバルト(黒い森)

日本は国土の3分の2が森林であるが、ドイツの森林は国土の3分の1に過ぎず、しかも氷河期にいったん減んだ後にできた森林であるため、日本の森林のような種の多様性は見られない。

氷河期の後のシュバルツバルトの自然植生は、4分の3が広葉樹、4分の1が針葉樹であったが、“得体の知れない森”という意味で“黒い森”と呼ばれていた。人々は、ナラの実(どんぐり)で豚を飼育したことから始まり、その後、西暦1100年代からは修道士による開墾・畑地化、1700年代からは鉄・銀・塩・ガラスを製造するための燃料として森林を利用しつくしてきた。1800年代からは、広葉樹に比べ成長が早く、また加工しやすい針葉樹が植林され、現在のシュバルツバルトはトウヒの人工林になっている。しかしながら、近年では、1990年代初頭に大嵐を受け多量の風倒木が発生したこともあり、針広混合林の多様な森林が災害などの圧力にも強いことから、広葉樹も植林するようになった。

・フォレスターとマイスター

ドイツ人にとって、“美しい森”とは人手をかけて作りだすものである。森がどのようにあるべきかは人間社会全てが関わるものであり、それぞれの森には“フォレスター”という森林を監督する立場の人物が存在し、森林所有者をはじめとする関係各位との協議・調整などを行っている。一方、実際に間伐し、木を運び出すなどの作業の

達人、技術者は、“マイスター”という職人の親方を意味する言葉で呼ばれている。
(社会的にその地位は認められている。)